

● 高澤良一 第七句集 宿好

● 一月―三月

お元日目許賢き鳩が来て

浅黄空おらが一茶の國の春

泥繩の一年が又生まれり

歳旦吟踏まえ所が大事なり

申し出るごとくに年の来給へり

こざつぱりして定年を迎ふ年

待望の景氣上向く年ならず

年酒して赤熊しゃぐまのごとく目がすわり

年男さすれば龍となり舞はん

抜き放つだんびらのごと年立てり

千里眼年神霞む野に立てり

リラツクスリラツクスして年迎ふ

言葉にも矯め方があり姫始め

鏡餅ことし奮発したりけり

掌が飛んで来るなり歌留多取

食積のまづ柔らかきものつまむ

年賀状ああこの人のこの癖字

初雀トコトコトツと石畳

壁に杖立てかけてあり初句会

福寿草今年定年自適の日々が待たれけり

六十年寝起きの一間初明り

死んでゆく身故の花鳥風月とよ

鏡餅不景氣の年重ねけり

筆始め要らぬところに力入れ

連れ立ちて仲見世をゆく春シヨール

身綺麗になりて辰年迎へけり

人波に旨く乗りけり初詣

赤ん坊の笑ひ初めなり福は内

屑籠に二日の日差し移りけり  
裘裘見て振り返る  
泉岳寺粉雪じゃんじゃん降りにけり  
梅林は蒼ばかりで素っ気なし  
雲にも雪にもならず唯の雨  
予防注射したもののさあどうなんだ  
寒んの採尿咄嗟に出たりするもんか  
着膨れて唯唯診察待つばかり  
手袋をしてゐてうっかり落し物  
切通し朝比奈 熊野神社磐しぼる水凍りつき  
切通し落葉朽葉を踏み付けに  
三極と見しがまさしくさうであり  
さて何本ここから見ゆる崖つらら  
もう一本引きずられ落つ崖つらら  
梅林に鋏と鋸のこの剪定音  
梅林の剪定済めば鴉が来  
柿の蒂カアの一ト声凍みるなり  
山鳩のごとく身を揉み寒ん払ふ  
とつつきの梅の一輪嗅ぎゐたり  
山歩き煤け木五倍子の芽に出会ふ  
ざうざうと山の枯蔓滝なせり  
鼻莫迦になるまで寒んの通勤路  
寒曉の国道をゆく貌つんつる  
街路樹の枯木のパントマイムかな  
大寒の底光りせる檜青葉  
探梅の探しあてたる一二輪  
極寒をこくんと一つ醤油の音  
火の用心命用心寒最中  
出勤の一人一人の余寒顔  
瘦せ杭の彼方に一つ浮寝鳥

ポケットの握り拳も氷点下  
塗箸がはたまた牡蠣が滑るのか  
着膨れてじつと一日家の中  
寒晴れにああと鴉も諾ひて  
寒晴れの飛行物体ジュラルミン  
心臓が縮まるけさは寒いねえ  
風邪引いて床に打ち臥す図は平目  
風邪の身の海月さながら廁まで  
僧正のそらそらそらと豆撒く手  
八幡宮宮司を上座午まつり  
その中に新あらの鳥居も一の午  
午まつり氏子ら煎餅座布団に  
三寒の黒竹粹な一商家  
寒晴れの鼻梁に海の風少し  
紅梅のいろの飛びたる訪問着  
雷門潜り四温の中国語  
貴女まあお変わり無くてと針納め  
つつみ紙楚々と開きて針納め  
針納む美風普く傳はりて  
この道で生活たつき立て来し針供養  
まなうらにミシン踏む母針納め  
紅絹もみいろに浅草の空針納め  
鼻の上にちよこんと眼鏡針納め  
青空に木の葉一枚吸はれゆく  
鳩の眼のくりくりけふは春立つ日  
年の豆日差しに紛れてしまひけり  
大銀杏隆と曙豆を撒く  
鬼やらひ鬚も凜々しく武蔵丸  
豆撒きの淡谷のり子のこゑの張り  
杭打ちて二月の蚯蚓驚かす

玻璃越しに雀を覗く寒がり屋  
立春のリビング・ルームに鳥影さす  
立春の日に当たりたく庭に出づ  
寒晴れの隣家に来意告げゐたる  
乾燥芋焙り上手よ婆ちゃん子  
さんざんな日の食卓にほうれん草  
冬鶯吸ひ付くやうに梅が枝に  
尾の長きこの鳥去れば寒暮の木  
鈴懸の意地といふ他なき枯れ瘤  
ふきのたう月例会に持ち込めり  
浅春の櫂に鶺鴒のむかう向き  
干柿のこれで五つ目癩な種  
立春の肉屋の前を通りけり  
酷寒に打たれて覺めぬ梅の性しやう  
梅見ての余生などとはとんでもない  
旧軍港浮寝の鳥もなかりけり  
人を見て寄り来る鴨の日和貌  
定年がもう目の前に水温む  
鉢小物持出し春の土いじり  
水温む池に棒切れ浮いてをり  
水温む水面に顔を持ってゆく  
春めくと家路半ばにして思ふ  
砂場の子遠く見守る四温の目  
すってんと転んで掴む春の土  
暖くなりて砂場の砂いじり  
豆撒きの赤鬼さんと青鬼くん  
一通り梅林を見て引き返す  
寒がりには内弁慶に似て家居  
のんのんと海上に出る春の雲  
三さん一びんの弥太郎戀猫徘徊す

花桃は田舎娘の器量佳し  
血色よき兒童が通る春日中  
鳥雲に年金のこと生活たつきのこと  
蝌蚪に見る定年といふピリオッド  
あほむくもうつむくもよし山椿  
痛み分けてふ語がふつと寒椿  
苗札もびしよびしよに水遣りにけり  
粗榧の葉に吹きつゝのる涅槃西風  
日の差せば浮き上がり来る花三極  
土佐水木枝は木臘の光ゲ持ちて  
枯れてをりウツボカズラの壺半分  
やみくもに連翹の芽をつけたがる  
チューリップの芽立ち囀り初むやうに  
枝先に合歡の枯れ莢ひいふうみい  
うぐひす餅それでと話促せり  
棒切れをずるりと滑り蝌蚪の紐  
五分咲きの梅と聞きしが嘘ばかり  
つくねんと柿の木いっぽん枯月夜  
青空のまま昏れ柿の蒂月夜  
年金の本など読んで目借り時  
仕事かたし来て春菊のごまよごし  
山茱萸の弾けてぽつと夕日中  
もめごと一段落し桃の花  
梅汚れ番の目白来ずなりぬ  
花つけてとつても寒き日の山茱萸  
土いじりするりと抜けてはこべの根  
世話なしの都忘れの株殖やす  
月あるも寒さしぶとき戻り道  
幼子に董のいろを言はせをり  
クロツカスぐらと地表を吹ける風

辛夷吹き天地の間を抜ける風  
花ミモザ黄み搔き立てて咲けるなり  
船で来て安房の花菜に染まらんと  
茅ヶ崎 氷室椿庭園  
洋椿和椿椿園巡る  
鳥ごゑのときに絶えたり椿園  
早咲きの椿椿と口揃え  
毛糸帽椿の花粉付けて来し  
日月のあかあか椿白椿  
喋々と鳥語椿の林なす  
初蝶のいとたをやかに舞ひ出しぬ  
靴先で朴の落葉を返すべく  
春めくと探りを入るゝごとき日差し  
快活に道問ふ青年白木蓮  
春櫂ゆとりをもつて眺めけり  
杏咲く情に溺るるごとくなり  
杏は桃に一足先にと云うて散る  
連翹も微笑年金にも課税